

⑬ 定岡ますさん

【入信の道程】 58 定岡ます姉

五歳の男の児の死亡した葬式にゆき、初七日に三部経、愁嘆している母親に法話をした。「人世は苦が半分、楽が半分ですが、八十歳まで生きて楽しめる人世に、わずか五歳で逝かれるということは、よい方から言えば祖先のかたが浄土からこの人世を見られて、この世のことに追いついて立てられて、仏とも法とも思われぬのを哀れに思召して、子供となって顕れ、蝶よ花よと慈しみ育てる間に死なれたら、手中の玉を失うたように苦しみ、また逢う世界に出ようと真剣に求道せられる。悪い方からいえば殺生の報いで早逝されて、業に引かれて地獄で苦しまなければならぬから、残った親が早く信仰に目覚めて済度してあげなければならぬ。どちらにしても残ったものは、早く信仰が徹底するように求めなければなりません」

「ほんとうに遇えますか」「真理の証りの世界にゆけば神通自在ですから、その子供のところにいつて済度することができ

るのです」「できるとすれば、鉄の草鞋をはいてでも世界中を探して信仰を求めます」
私が毎晩五年間在家布教をしていたときですから一ヶ月ほど参詣し、ある晩「私は駄目ですからやめます」「どうぞおやめなさい。鉄の草鞋をはいてでも世界中を探すといった覚悟は嘘でしたか、下駄が一足も減ってはいませんよ、子供さんほどんな責め苦を受けてもよいのですか」「はいもうしわけありません」と毎晩つづけて参詣していた。ある日大喜びをして報告にきた。

「父が田舎から出てきて「おます、おまえは死んだ一人の子供が可愛いかい、残った四人の子供が可愛いかい」「両方が可愛いです」「死んだ子供には手がおよばないではないか。生きている子供を大切に育てる責任が母親にあるではないか、洗濯も掃除もほったらかしで、求道求道といって泣いてばかりいて、それで主婦の責任がすむか」「側で見ている四人の子供は飢死にはさしません、手の届かないところにいる子供が親の側を離れて苦しんでおるかと思えばじっとしておられません」

「信仰をやめないかい」「死んでもやめません」「お前は坊主に騙されている。あれだけ明るかったお前を、こんなに暗い人間にしてしまったのだから、俺は本山へいつてあいつに坊主をやめさせてやる」「お父さんお待ちください。先生は信前と信後との水際を分けて、信前では善因善果、悪因悪果の因果の道理が信仰の入口であって、私たちが自力の修行ができないから、仏さまが名号の中に因も果も機も法も成就して、私に廻向してくださいのが他力の教えであり、合点するのは易いが実地に仏さまと一体になるのが難しいと教えらるるのです。法の尊いことはよくわかるのですが、それは薬の効能書であって、私の心が頑固で聞いてくれないのです。死んで救われるのだと教化していただくのが信前で、生きて文句を言っているまま、心の往生するのが平生業成といって、この世で助かったという大自覚を得たのを信後と教えらるるので、真宗は聞即信の一念で往生が決まるといふのが真宗の極意と教えられますが、頭は承知しても魂が知らん顔しているのです。」

「そんな信前とか信後とかが凡夫にあるものか。頭とか魂とか難しいことをいったら、誰もいただくものがないよ」「お父さん、他力を大風に灰を撒いたような聞き方をしていては仏智の不思議はわかりませんよ。」

信前とは機を包んで法を眺めているので、これを第二十願の行者といい、実地にいただいたか、苦抜けたか、開発したかとわが機に念を入れてみると、死んだ先の話を聞いているだけだから今は何ともない。そこを必死になって求道すれば必ず心の親に逢える、晴れて満足できたところから後を信後といい、機と法とが一体になったのを第十八願の行者というのだそうです。すから、本当に唯になるまで生命がけで求めさしてください」「そんな難しい馬鹿なことがあるものか」「聖人様が難中の難とおっしゃってあるではありませんか」「お前が気でも狂うたらどうするか」「人間世界のものはみな気が狂っているのです。名誉とか地位とか財産とかいっているが自分を忘れて死にます」「馬鹿なことを言うな、俺は本山にいつて坊主をやめさせてやる」「お父さん、本山へゆかれたら、私は舌を喰い切って死にます」「芳さん（芳次郎が主人の名前）死んだ子供が可愛さに何もかも捨てて求道しているのだから赦してやってくれませんか、もしもおますが笹を担いで歩くようになったら引取りま

すから」と父も泣いていました。私も狂気になりはせぬかと心配していたのですが、仏さまがついておいでになるから間違いはありません。父が帰ったのち、主人と長男とが「世の中で坊主が一番嫌いだ、家庭をめちゃくちゃにしやがった」との話声を聞いて、私も申訳がないと泣きました。

その夜の午前二時ごろ、八方塞がりでも猛火に包まれて息もできない。聞いたも知ったも覚えたもみな感情ではないか。知恵も学問も修養も、それはみな凡夫の概念にすぎないのではないか、びくとも動かぬ逆謗の屍が私の本性で、素直らしいものは微塵もなく、絶対の悪性が無間のどん底へ唸り込むより道がなかったと往生の望みが絶えたとき、本願の狙いの正所被の機が顕れたので、我能く汝を護らん、すべて水火の難に墮せんことを畏れざるの勅命が貫いた一刹那、親さまこれを無条件で撰取してくださったのでございませうか、親さま、唯とは墮ちるままが唯でございませうか 南無阿弥陀仏なむあみだぶつと大声で称名しているので、主人が飛び出してきて、どうしたどうしたと叫びますので、私は主人にしがみついて「唯でした唯でした、私一人を唯で救う本願でございませうか。動くままが南無阿弥陀仏、息するままが南無阿弥陀仏、なんと不思議な親でございませうか」と泣いて喜んでいきますので、主人も大喜びしてくれました。

あらあ 驚いたおどろいた。子供を救うために一心不乱で求道して絶対他力の信仰に生きさせていたただいてみれば、死んだ子供が私を済度してくれたのであった。教えて帰る子は知識というのはこのことであつたのか。私は一切を拝まなければならぬ、こうも不思議の仏智であつたのかと大慶喜しました。先生が見るもの聞くものみな仏法といわれたが、今までは機を見るのを恐れていたが、法を見るままが機、機を見るままが法、無限の煩惱には無限の法、

願力無窮にまませば

罪業深重もおもからず

仏智無辺にまませば

散乱放逸もすてられず

とは無碍自在の喜びではないか。先生が十方法界我がものなりといわれたが、泥の一杯つまつた一升徳利に大海の水を入

れようとしても入らないぞ、一升徳利を大海に投げ込めば浮くも沈むも南無阿弥陀仏、小我を滅して宇宙の大我に生きるとはこのことか、あの逆境がこの慶喜、転悪成善の益、心多歡喜の益、私が正定聚の真仏弟子とは身を粉にしても報ずべしと立ち上がりました。

七歳の子供が、いつも柿の木に水をやって、早く実ればよいといっているので「実ったらどうするの」「一番先がお寺の仏さまに、二番目は泣きよったお母さんを笑わすようにしてくださいから、先生にあげる」といっています。

心配になるのでまた父がやってきました。私にこにこして庭を掃いているので驚いて「どうしたかい」お念仏しながらお仏壇のお戸を開いて「お父さん、どうぞ京都でも東京でも行って先生の悪口を言ってください。私が先に行って申し開きをいたします。真宗は唯じゃただじゃと言っています、そんな簡単な口ではありません。法の尊さに眼をつけよ、成就した本願を聞け、他力廻向だからそのままではないかと、自分の機を抜きにしているのは、ご教化の話ではありませんか。鏡に向け姿を見るな、とは馬鹿の言うことでしょう。法が成就していても（十劫の昔に成就）、機が摂取されていなければ（一念の信決定）、自分は助かっているのではないではありませんか、廻向するぞ廻向するぞと空手形ばかり聞いていて、本當に廻向してもらった喜びはないではありませんか。この機が満足するまで実地に求道するのが、大千世界に満てらん火をも過ぎゆきて聞けの教化どおりに求道するものではありませんか、ほんやりして素直な真似をしているのは無力で墮落ではありませんか」私が申し開きに行きますと言ったら、父は口に手を当てながら「俺が悪かったわるかった」と言われたから、お父さんに謝ってもらいたいのではありません、こんな不思議の世界のあることを知っていたいただきたいのです。

次の年父と長男とが一週間のあいだに相次いで逝去んだ。親族のものが、五歳の末子が死んだときに発狂するのではないかと心配していたが、今度は大変になりはせぬかと注意していた。ところが親族のものにだって悩む顔は一度も見せなかった。そのうな、こんな大地震があるから用意せよと前の年に用意しておいてくださった仏さまのご方便であったのかと涙を呑んでい

るけれども、私の前にくると ぽろぽろ涙を流しながら 「親不孝ものは私一人だと反省しています。親が死んだが苦しいか、子供が死んだが辛いかと、秤にかけてみれば親の方がずっと軽いのです。なぜかと言えば親の方はすわぶり取った糟ですからいつ死んでもよいと思っっているのです。子供の方は今から成長して成功してくれば、私の老後に楽をさしてくれるだろうと思っっていたのに希望がはずれて落胆したのです。

これも心の底を掘ってみれば、やはり欲からでございませう」と言っただけ悔しいが、信仰の上からよく自分の心を見せたいだいたいと思っただけです。

主人も奥さんの信仰に動かされて、庭にりっぱな柱などを仕入れていたのを倉庫に入れ、座敷を広めて、子供の命日に毎月法話をさしていただいた。後に主人は総代となり奥さんは婦人会長となり、戦災後の本堂再建に全力を注いでいただき、夫婦ともに寺の真柱になっていた。